

高田教育研究会編『教育創造』134号（平成12年3月）pp.23-26に掲載。
もとの原稿よりPDFファイルに変換しましたので、実際に掲載されたものとは、書式や頁設定などが多少変更されています。

モラル・スキル・トレーニング・プログラム ～スキル・トレーニングを取り入れた道徳授業の展開～

上越教育大学学校教育学部助教授 林 泰 成

1 はじめに

2002年度から完全実施される学習指導要領では、道徳の基本的な考え方は従来のもので大きく異なっていない。しかし、細部に目をやれば、学校の教育活動全体を通して行う道徳教育の目標が、「総則」の「教育課程編成の一般方針」に明確に位置づけられたこと、また、「第3章道徳」の目標では、「道徳的価値の自覚を深め」ることが加えられたことなど、いくつかの変更点を見いだすことができる。

そうした変更点のなかからとくにここでは、「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」において、「ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動を生かすなど多様な指導法の工夫、魅力的な教材の開発や活用などを通して、児童の発達段階や特性を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」が明記されている点に注意を向けたい。というのも、『小学校学習指導要領解説：道徳編』によれば、道徳教育改善の基本方針の3点のうち第1のものは「体験活動を生かした心に響く道徳教育の実施」なのだからである。つまり、体験を有効に生かすことが強調され、さまざまな体験を通して「道徳的価値の自

覚」を深めることが望まれているのである。

しかし、体験は、なにも、ボランティア活動や自然体験活動などの学校外での実践活動を意味するだけではない。『小学校学習指導要領解説：道徳編』でも、「体験を生かすなどの学習指導」を解説するなかで、「道徳の時間においては、観察や調査、実物に触れる活動、様々な立場について考える役割演技、コミュニケーションを深める活動、感性や情操をはぐくむ体験などを取り入れることが考えられる」と記されている。授業そのもののなかで実施可能な体験的な（あるいは疑似体験的な）活動もまた考慮されるべきなのである。このように考えると、そのための有効な方法としてまず思い浮かぶのは、最近では学級活動のなかでよく行われている構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル・トレーニングなどのエクササイズであろう。

けれども、これらのエクササイズはかならずしも道徳的なものではない。だからこそ学級活動のなかで実施されることが多いのであろう。そこで、私たちの研究グループでは、道徳の時間に実施できるような、道徳的な視点からとらえられたスキルのトレーニングと

してのモラル・スキル・トレーニングを提案している。とくにこうしたトレーニングは、日常生活のなかですぐに生かせるという点で、直接的に「生きる力」につながるものだと言える。もちろん、道德教育は、たんに表面的な行動を指導するだけではなく、内面的な資質としての道德的実践力を養うものでなければならないが、こうしたトレーニングを繰り返し、折に触れて自らの行動を反省することで道德的実践力もまた養われると言えよう。以下ではその考え方と具体例を紹介しよう。

2. モラル・スキル・トレーニングの考え方
構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル・トレーニングを学校教育に生かした実践報告が数多く出されている。私たちの提案するモラル・スキル・トレーニングもそうしたトレーニング・プログラムと類似したものである。とくにソーシャル・スキル・トレーニングとの関連は強い。

ソーシャル・スキルとは、たとえば、挨拶すること、質問すること、電話することなど、特定の社会的課題を上手に遂行する能力である。それをロール・プレイングなどを通して身に付けて行くトレーニングが、ソーシャル・スキル・トレーニングである。これは、子どもたちの自尊感情を高め、社会性のない子どもや引っ込み思案の子どもに対して効果的であるとされる。これを道德場面に応用したものが、モラル・スキルトレーニングであり、同様の効果があると考えられる。

しかしそうであるなら、あえて「モラル・スキル」と表現しなくても、道德教育においてソーシャル・スキル・トレーニングを行うと言えれば十分のように思われるかもしれな

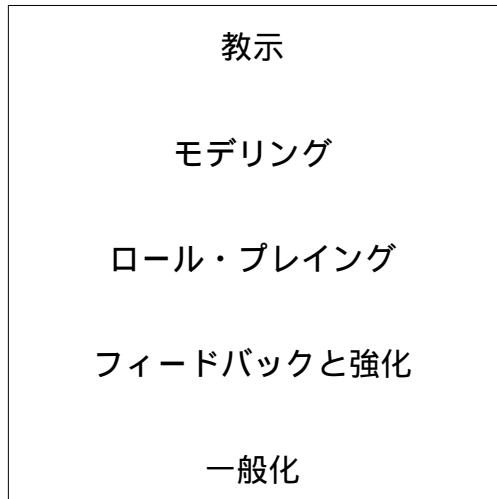
い。しかし、私たちは、あえて「モラル・スキル」という表現を使いたいと考えている。というのも、ソーシャル・スキルがすべて道德的であるとはかぎらないからである。たとえば、詐欺のように、ソーシャル・スキルを有効に利用した犯罪もある。また学校でも、ソーシャル・スキルを利用して集団をコントロールし、特定の個人をいじめるというようなことが起こったりする。しかし、モラル・スキルという概念は、そうした形で活用されるソーシャル・スキルを含みはしない。それが道德的ではないからである。その意味では、モラル・スキル・トレーニングは、ソーシャル・スキル・トレーニングよりももっと限定されたものなのである。

しかし、あるひとつのスキルが道德的であったりなかったりすることもあるから、ソーシャル・スキルもモラル・スキルもスキルとしては同一のものであると批判されるかもしれない。たしかにそのとおりである。けれども、一方で、道德的であるかないかがまったく問題にはならないソーシャル・スキルもあるので、道德教育の視点でスキルをとらえようとするとき、やはり、ソーシャル・スキルとは区別された道德的善悪・正邪のフィルターを通したモラル・スキルという概念が必要なのである。

つまり、相手の言うことに耳を傾けるとか、相手の目を見て話すなどの個別的な基本スキルを問題にするなら、ソーシャル・スキルもモラル・スキルも同じものとしてとらえられようが、道德場面でどう行動すべきかということを考え、そうした場面と関連づけたスキルを問題にしようとするなら、モラル・スキルという概念の必要性は明らかである。

3 プログラムの流れ

モラル・スキル・トレーニングのプログラムは、数時間の授業によって構成される。その各時間の授業の基本的な流れは、以下のとおりである。



「教示」においては、まず、取り上げるスキルについての説明を行う。「モデリング」では、教師が一つのモデルを示す。「ロール・プレイング」では、子どもたちに自由に演じさせる。「フィードバックと強化」では、そのプレイのよい点を賞賛し、スキルを強化する。「一般化」では身につけたスキルを日常場面で使えるようにする。

ロール・プレイングにはさまざまなスタイルのものがあるが、ここでは、状況を設定し、後は子どもたちが自由に演じるというスタイルのプレイが望ましい。スキル・トレーニングというと、型にはめることのみであると誤解されることがあるが、道徳教育という視点に立てば、型はめだけですませるわけにはいかない。そう行動することが望ましいのだと子どもたち自身が自らの良心にしたがって判断するのでなければ、内面的資質としての道徳的実践力など育つはずがない。したがって、ロール・プレイする際にも、子どもた

ちの主体性を生かすようにすべきである。

ここに示した流れ図は、ソーシャル・スキル・トレーニングのものを参考にしたものだが、これはあくまでひとつの基本型であって、これが唯一のものであると考える必要はない。たとえば、子どもたちにまず自由にロール・プレイさせて、その後でモデルを示すというようなことも可能であろう。

こうしたひとかたまりのものを、私たちはモジュールあるいはユニットとよび、それを複数個集めてひとつのプログラムとしている。

4 モラル・スキル・トレーニング授業の実際

それでは、具体的にどのような授業になるのだろうか。

長野県信濃町立柏原小学校教諭の中澤正幸氏は、現在上越教育大学大学院において、モラル・スキル・トレーニングのプログラム開発とその効果の検証に取り組んでいる。

中澤氏は、次の表のように、道徳に関する認知と実践の視点から、取り上げるべき事例として4つの組み合わせを考え、それぞれを1つのユニットとしている。

	実践	道徳的に善い行為を行わない。	道徳的に悪い行為を行ってしまう。
認知			
	道徳的な善悪を知らない。	善いと知らないことはできない。	悪いと知らないで行ってしまう。
	道徳的な善悪を知っている。	善いと知っていてもできない。	悪いと知って行ってしまふ。

各ユニットに入れるべきエクササイズは、子どもたちの実態に合わせる必要がある。中澤氏は、児童に、嫌な気持ちになったこと

や、だめだとわかっているのにやってしまうことなどを自由記述で答えさせて、それをもとに各ユニットで扱う具体的場面やエクササイズを定めている。中澤氏のプログラムの指導案から、ユニット1を紹介しよう。ただし、紙幅の都合上、筆者が短くまとめた。

ユニット1

< 道徳的な善悪を知らないで、道徳的に悪い行為を行ってしまう場面 >

放課後、Aさんは冗談のつもりなんだろうけど、そこにいない人のことを「センスが悪い」とか「信じらんない。」とか私(B)に言う。

(1)ねらい

誰でも、その場にいない人のことをつい無意識に悪く言ってしまい、周りに人にも嫌な思いをさせてしまうことがあることに気づき共感し、他の同様な場面を具体的に知り、その場面でのお互いの行動の仕方を学び、実践に生かそうとする。

(2)獲得目標とするスキル

B役：その場にいない人のことをつい無意識に悪く言ってしまう相手に、その行動が周りの人にとって嫌な気持ちだったり迷惑をかけていたりすることを、上手な方法で伝えること。

A役：アドバイスを素直に聞き入れ、今までの自分の行動のまずさに気づき見つめ直し、その行動を改めていこうとする態度をみせること。

(3)指導上の留意点

プログラムの最初でもあるので、ウォーミングアップをして身体をリラックスさせてから、本題に入る。

(4)展開の略案

	教師の指導	児童の反応	備考
インスタレーション	事例のような場面では、何が問題だと思いますか。	・いない人の悪口を言っている。 ・話を聞かされた人も嫌な気分になる。 ・たぶん、言った本人は周りの人の気持ちに気づいていない。	・場面用紙
モデリング	先生が悪口を言う役をしますから、誰が悪口を聞かされる役をやらせてもらえませんか。 ありがとう。見ていてどうでしたか。嫌な気持ちになった人は相手にどうアドバイスすればいいですか。 アドバイスされた人はどういう態度をとればいいですか。	・上手だな。 ・悪口になることを教えてあげる。 ・自分のために言ってくれているのだから、けんかにならないようにする。	・ポイントを記入した用紙
リハーサル	それでは実際にみんなでもやってみましょう。4人グループで、悪口を言う人とアドバイスする人、2人は、様子を見ていて「こうすればもっとよくなること」を言ってあげる人になってください。	・アドバイスのときどう言おうかな。 ・恥ずかしくてなかなかうまく言えないな。	
フィードバック	感想を述べてください。今週1週間、今日のような場面があったらぜひ思い出してみてください。そして、この用紙にその様子を書いてください。	・なかなかうまくいかないか。 ・できるだけ相手の立場になって行動しよう。	・感想用紙 ・ホームワーク用紙

引用文献・参考文献

- 文部省『小学校学習指導要領解説：道徳編』1999年。
 菊池章夫・堀尾一也（編）『社会的スキルの心理学～100のリストとその理論～』川島書店、1994年。